

官立弘前高等学校時代の太宰治と自筆ノートの歴史的考察

中園美穂

はじめに

従来、作家太宰治についての研究は、文学上の観点から、彼の作品を中心に読み解かれることが多い。そのため歴史学の中で、人物としての太宰や、彼の作品が研究されることは少ない。そのなかで、太宰が官立弘前高等学校時代に使用した自筆ノート「英語」（一年次使用）「修身」（二年次使用）を多角的な面から分析しようと、平成二十二年度から弘前大学で研究プロジェクトがはじまった。筆者は、同プロジェクトに参加し、歴史学の観点から自筆ノートを分析する機会に恵まれた。その成果は『平成二十三年度 太宰治自筆ノート研究プロジェクト成果報告集』としてまとめられ、筆者は「作家太宰治ができるまで」太宰治自筆ノートを手がかりに¹⁾を執筆した。

前掲報告集で筆者は、自筆ノートに書き残された文字や絵など、様々な情報について、当時の新聞や雑誌などで調べ、官立弘高時代の若き太宰が何に関心を持ち、どのような考えを持っていたのかを考察した。自筆ノートは、後に作家となった太宰の作品を解く重要な材料であり、ノート自体も歴史資料的な価値を持つものである。

本稿では、前掲報告集の成果を取り入れつつ、新たに判明した事実を紹介し、歴史学の観点から見た若き日の太宰治に迫りたい。具体的には、学生時代の太宰が何に関心を持っていたかなど、若き太宰の心情や願望を考察することになる。それは後に作家となった太宰と彼の作品を知る上でも、非常に重要な鍵になると思う。

なお、本稿であつかう太宰治自筆ノートは「複製 太宰治自筆ノート」（監修・長谷川成一弘前大学附属図書館長、企画制作・弘前大学附属図書館）を利用した。

一 父源右衛門とアドルフ・マンジュー

自筆ノート「英語」の裏表紙内側に「アドルフ・マンジョウ」などと太宰の自著がある。それは俳優アドルフ・マンジューを示し、その動機や当時の太宰の文学作品との関係については、前掲報告集の通りである。しかし、いつ頃、太宰は父源右衛門と俳優アドルフ・マンジューが似ていると思いついたのだろうか。²⁾

その直接的契機とは、父源右衛門の死去だろう。源右衛門は大正十二

年（一九二二）三月四日に死去し、葬儀は金木町で十九日に行われた。一方、三月中旬に太宰は県立青森中学校の受験があった。受験に合格した太宰は、下旬に青森市寺町へ寄宿したという。青森市では、三月二十三日から映画「三銃士」（大正十年日本公開）が松竹座で公開されている。「三銃士」には冒険活劇で人気のダグラス・フェアバンクスが主演し、アドルフ・マンジュールがルイー三世役で出演している。映画「三銃士」は大好評につき、上映期間が延ばされて二十七日までの公開となっている。青森に寄宿した太宰が、この期間に「三銃士」を鑑賞した可能性がある。父の死去後、「三銃士」を観ることで、太宰は初めて父とアドルフ・マンジュールが似ていると思ったのではないか。もし、この時点で観ていないとしても、大正十五年十月に青森で「三銃士」が公開され、十二月には、アドルフ・マンジュール主演の「纏れ行く情火」が同じ青森で公開されている。また、昭和二年（一九二七）一月二十四・二十五日に弘前の慈善館で「巴里の女性」と「三銃士」が弘高映画研究会・鷹城キネマ同好会・弘前映画研究会の推薦で上映されている（『弘前新聞』昭和二年一月十七・二十一・二十二日付）。偶然にも両作品にはアドルフ・マンジュールが出演している。いずれにせよ、官立弘高に入学する前に、太宰のなかでは、父とアドルフ・マンジュールの容貌の関連性が確定されたものだったといえよう。³

二 地方都市弘前とドイツ映画

拙稿で、映画が都市のインテリ層の娯楽として定着していたと記した。

すでに映画は「第八藝術」と称され最先端の芸術と位置づけられていた。ヨーロッパ映画ではドイツが映画界を鞭撻していたという。ドイツ映画の一つの特徴に表現主義があり、その代表作が、自筆ノート最大の似顔絵であるコンラート・ファイトが出演した映画「カリガリ博士」（大正十年日本公開）である。⁴

弘前では、映画「カリガリ博士」が大正十一年（一九二二）五月六日から大和館で上映された（『弘前新聞』大正十一年五月六日付）。その後、地元新聞の『弘前新聞』で連載記事が生まれ、「カリガリ博士」が今までの中で「一番芸術的価値ある」ものと報知された。翌年、『弘前新聞』の「キネマ週報」によれば、ドイツから「芸術映画」が入ってきており、弘前市でも表現主義映画などが近いうちにみられるという。このような映画が弘前で上映された背景には、官立弘前高等学校の存在と同校学生に組織された弘高映画研究会などの活動もあっただろう。⁵

例えば、弘高落成記念の無料映画公開として弘高映画研究会主催で「ヂーキル博士とハイド氏」が大正十三年一月に上映された。上記作品はアメリカ映画で、ジョン・バリモア主演の「狂へる悪魔」（大正十年日本公開）として名の通った作品である。作品はイギリスの作家ステイブンソン原作の映画化だった。実はコンラート・ファイトも、大正十二年に日本公開されたドイツ映画「ヂーキル博士とハイド」を主演している。彼が主演した「ヂーキル博士とハイド」は、大正十三年六月に弘前市の大和館で公開された（『東奥日報』大正十三年六月十九日付）。この作品は、善悪の二重人格を主題とし、青年達には魅力的な題材だっただろう。⁶

また同会主催で映画「ドクトル・マブゼ」が大正十三年二月に二日間公開された。「ドクトル・マブゼ」（大正十二年日本公開）はドイツ表現主義の作品である。同年五月には、同会主催で「独逸二大映画」として「怪談五種」「花嫁人形」が公開された。大正十三年の弘高映画研究会が主催した上映作品は、たいへん興味深い。「怪談五種」（一九一九年ドイツ公開）には、コンラート・ファイトが出演している。⁷⁾

コンラート・ファイト主演「孟買の一夜」や「サタン」が上映されたのも弘前である。前者は「犯罪哀話」、後者は「神秘劇」という。⁸⁾当時の青森市や弘前市は都市を形成していた。そのうえ官立弘高という全国各地のエリート学生が集まっている弘前市には、表現主義映画も含めドイツ映画や名画を好む土壌があったと思われる。

昭和二年（一九二七）十一月、京都帝大映画研究会主催、弘高映画研究会が後援するかたちで、左記の映画作品群が弘前座で上映された。⁹⁾「ガリガリ博士」とは「カリガリ博士」である。

来る五六の両日間、弘前座に於て文芸映画「恋に生きる者」、南海の情花、ガリガリ博士、盲目の誓ひ等の名画を上映（読点は筆者）昭和初期、「カリガリ博士」は名画として周知されている。同作品が、太宰の官立弘高一年生時に上映されたのは、たいへん興味深い事実であろう。

三 芥川龍之介とコンラート・ファイト

「カリガリ博士」をはじめ、弘前市ではコンラート・ファイト出演の

映画が公開されていた。そのうち「カリガリ博士」以外に、太宰が敬愛していた芥川龍之介を通して、コンラート・ファイト出演の映画を鑑賞したと考えられる作品がある。それは「我れ若し王者なりせば」（昭和二年四月日本公開）である。これはコンラート・ファイトがアメリカの俳優と共演したアメリカ映画なのである。

芥川は「文芸的な、余りに文芸的な」で「我若し王者たりせば」を鑑賞したことと、その主人公詩人ヴィヨンに言及している。「文芸的な、余りに文芸的な」は、昭和二年（一九二七）七月一日発行の『文藝春秋』に所収されていた。青森市では、映画「我れ若し王者なりせば」が同年七月二日から上映された（『東奥日報』昭和二年七月一日付六月三十日夕刊）。太宰が芥川の文章を読み、映画を鑑賞したと考えられる。もし、この時を逸したとしても、同年十一月に弘前市で同作品は上映されるので、太宰が鑑賞した可能性は十分にある。「独逸映画界の重鎮」「希有の性格俳優」と讃えられたコンラート・ファイトの演技を存分に堪能し、作品そのものを楽しんだのだろう。芥川も「活動」を愛好しており、「ポー・ジエスト」が好みで、「我れ若し王者なりせば」をよいものだとほめていたという。¹⁰⁾

詩人ヴィヨンと太宰との関係は、彼が作家となつてからもある。小説「乞食学生」ではエピグラフと作品中にヴィヨンの詩を使用し、また「ヴィヨンの妻」を執筆するからである。官立弘高時代の映画鑑賞が反映しているのかもしれない。

太宰が芥川作品を読破する行為は想像に難くない。芥川は「文芸雑談」（『文藝春秋』第五年第一号、昭和二年一月）で

けれどもヘンダアソンも、ジョンソンに於けるボオズウエルほどの、力量を持つてゐるかどうか、

と執筆している。おそらく太宰は、一年生の英語「読方読解」の授業で、右記の「ジョンソンに於けるボオズウエル」を想起しただろう。英語テキストが「Johnson&Goldsmith」であり、サミュエル・ジョンソンが評伝形式で書かれているからである。自筆ノート「英語」三五頁には、筆記体で「Boswell」と記されている。つまり芥川の「文芸雑談」と自筆ノート「英語」には、サミュエル・ジョンソンやボズウエルの共通項があったと思われる。¹¹⁾

ところが、芥川は太宰の夏季休暇中の昭和二年七月二十四日未明に自殺をした。地元新聞『東奥日報』は二十五日付、『弘前新聞』でも二十六日付で芥川の自殺を報じた。周知のように、太宰は芥川の自殺に大きな衝撃を受け、それを契機として私生活にも影響が及んだという。そしてその具体的事例として、義太夫を習うことが挙げられている。それは次に太宰と義太夫の関係について述べておこう。¹²⁾

四 弘前と義太夫

太宰は昭和二年（一九二七）八月中旬に下宿先へ戻り、部屋に閉じこもり、ひとりの外出が多くなったという。服装が角帯姿になり、義太夫を習い始めるという。義太夫を習おうとしたのは、友人に語った「耳で聴く芸術」を磨こうとしたからではないだろうか。¹³⁾

浄瑠璃は耳で聴く芸術だから読んだだけではピンとこないね……。

こんど義太夫を習おうかと思っている。

当時、戯曲が流行しており、昭和二年から『近代劇全集』『世界戯曲全集』、翌年には、義太夫狂言時代物集や義太夫狂言世話物集も採録された『日本戯曲全集』が発行開始となる。弘前と義太夫の関係や、太宰自身が義太夫を習ったことが小説に利用されているのは周知のことである。昭和二年九月には、東京の女義太夫として有名な竹本組春・組照一行がやって来た。組春らが小説「津軽」に出てくる「紙治」や「野崎村」を披露している。『弘前新聞』によれば、弘前には久しく本場の義太夫が来なかつたため、公演は大好評だったという。¹⁴⁾

このほか、弘前市の天狗倶楽部の創立二十五周年記念として、義太夫大会が同年九月三十日から翌日にかけて催された。十一月十二日には柳風会の義太夫会が、壽町通り角の「幸吉姐さん宅」で開かれ、「壺坂」も披露されている。「壺坂」は小説「津軽」にも登場する「壺坂」である。なお、柳風会は弘前市内の奇抜な芸団で、芸界の新勢力と言われた。¹⁵⁾

小説「チャンス」では、太宰が「小土佐」¹⁶⁾を聴いていた話載っている。「小土佐」とは、女義太夫名人、竹本小土佐であり、昭和三年六月に来青・来弘、同年八月に来弘している。六月公演では、青森市の遊楽座および弘前市の弘前座で「朝顔日記」などが語り物として披露され、竹本小土佐が「壺坂寺の段」を披露している。新聞によれば、小土佐の十八番の一つが「壺坂寺の段」という。八月には弘前座で、小土佐が「おしゆん伝兵衛堀川猿廻し段」を語った。これらは、小説「津軽」や『回想の太宰治』に書かれた語り物であるから、実際に太宰が聴いた可

能性が高いだろう。つまり、その道の名人から「耳で聴く芸術」を聴いたと推測できよう。¹⁶⁾

太宰は「お俊伝兵衛」「朝顔日記」「鮎やのお里」などを好んだようである。右記三つは、それぞれ義太夫の「近頃河原達引 堀川の段」「生写朝顔話」「義経千本桜 鮎屋の段」に深く関係しよう。昭和二年当時、日本音曲全集が刊行中であり、『義太夫全集』上巻と下巻が出版された。上巻には「近頃河原達引 堀川の段」「義経千本桜 鮎屋の段」、下巻には「増補生写朝顔話 宿屋の段」が採録されている。小説「津軽」には「野崎村」「壺坂」「紙治」が出てくる。そのうち「野崎村」と「紙治」は、上巻の「新版歌祭文 野崎村の段」と「天網島時雨炬燵 紙治内の段」に相当するだろう。つまり『義太夫全集』は、太宰の好んだ義太夫と関係深いのである。筆者が利用した青森県立図書館所蔵の『義太夫全集』上巻と下巻には「津島文治殿寄贈」と捺印されている。津島家所蔵だったと十分考えられ、とても興味深い。¹⁷⁾

五 築地小劇場と小山内薫 ～「geschlossen」～

自筆ノート「英語」六四頁には筆記体で「Athena」とともに「geschlossen」とある。太宰治自筆ノート研究プロジェクト代表の長谷川成一氏に、「geschlossen」とはドイツ語で「閉館」あるいは「休館」を意味し、実際に劇場などの閉館日には「Geschlossen」の札がかかること教示いただいた。西洋の演劇を学ぶために渡欧した演出家小山内薫は、松竹キネマ所長時代に研究生等へ演劇史とドイツ語を教えてい

たという。演劇に携わる者には、ドイツ語が重要だったのだろうか。ノートの「geschlossen」は、授業中に太宰が舞台や映画を想像した夢の形跡に思えてならない。芥川龍之介はドイツ語から小山内を連想したという。第三次「新思潮」を出した頃に、芥川は久米正雄らと小山内を訪問した。芥川は小山内と会話をした際に、彼の口から出た「natürlich」というドイツ語を見ると、必ず小山内を思い出すという。太宰もドイツ語から小山内やコンラート・ファイトを思い起こしていたのかもしれない。偶然かもしれないが、自筆ノート「英語」九三頁には朱字で「Professor」を抹消し「ドイツ」、一三二頁に「Berlin」と書いている。¹⁸⁾

昭和二年七月十一日から二十日頃まで東京に行っていた太宰は、そこで築地小劇場を観劇している。築地小劇場とは、新劇を上演する日本初の常設館であり劇団名である。その築地小劇場を立ち上げたのが、土方與志と小山内薫であった。特に小山内薫は多分野にわたる創作家であり新劇の先駆者および権威であった。同年十一月には、ロシア革命一〇周年記念祭の国賓として招聘され、翌年三月には、新任の「ロシア大使」が「劇壇の士」として小山内や二代目市川左団次らを会食に招待している。その際の写真記事が『東奥日報』に掲載されている。つまり小山内薫は、多彩な才能を持ち、新劇の先駆者であり国を代表する人物といえよう。拙稿で触れたように、太宰は上山草人や大藤信郎といった多芸で海外で通用できる人物を好む傾向にあることから、小山内薫に対しても憧れがあったのではないだろうか。原仁司氏によれば、演劇について太宰と小山内薫は似た視点を持ち、太宰には演劇関係者の知り合いが多かったという。¹⁹⁾

その築地小劇場の地方公演が、昭和二年八月二十・二十一日、青森で開かれた。これは画期的なことだったろう。『東奥日報』では同年七月十三日付けの記事で、土方與志を取り上げ、近いうちに青森で上演する話を載せている。ただし、この期間、太宰は東京にいた。築地小劇場の来演に関する記事は、八月六日付けである。この日は太宰が和装に凝り、義太夫を習う直前と考えられないか。さらに同月十三日付けの十二日夕刊記事では、小山内薫の「築地小劇場の任務」が掲載された。⁽²⁰⁾

小山内は、広島県出身だが、軍医で父親の小山内玄洋が元弘前藩士のため、実は青森県人とみなされていた。「六花会」という秋田雨雀ら在京の青森県出身の芸術家達が組織した団体に所属し、その機関誌である『陸奥の友』に小説を載せていた。そして陸奥の友社賛助員および「在京青森県人名簿」にも名前を連ねていたのである。『陸奥の友』第九号（大正八年八月）には「名士の片影（八）創作家」として小山内は写真紹介されていた。小山内が青森県関係者であることは、よく知られていたことだったに違いない。なお、『陸奥の友』には太宰の父源右衛門や長兄文治が原稿を寄せていた。⁽²¹⁾

このような背景のある築地小劇場の青森公演を、多くの人は心待ちにしていたのではないか。画家の今純三は、『東奥日報』に、小山内薫は「当地方の人達とは一脈の優しい親しみ」の心の交流があると執筆した。太宰は、八月の築地小劇場の公演を楽しみにして観に行ったのではないだろうか。築地小劇場の地方公演は同年十一月十二・十三日に青森市、十四日に弘前市で開かれた。両市での公演は、太宰にとって芥川の自殺と同じくらい大きな衝撃だったのではないだろうか。⁽²²⁾

昭和三年の夏季休暇に、太宰は金木町の劇場で小学校の同窓生らと新劇を上演したという。一方、同年八月十五日に青森で築地小劇場が公演した。公演作品のうち「伯父ワーニャ」は小山内薫が演出したものである。太宰は、同窓会の新劇上演と築地小劇場の公演日が重ならなければ、観に行ったのかもしれない。また、公演日十五日から三日間、松木屋呉服店で菊谷栄の芝居絵展覧会が開かれた。菊谷は芝居絵を持参し帰省したという。その作品群は、今回公演の「伯父ワーニャ」や、彼が手がけた築地小劇場以外の作品もあった。⁽²³⁾

築地小劇場の地方公演が青森・弘前両市で開かれたのは、太宰の官立弘高時代であり、当時の都市インテリ層に大きな影響を与えただろう。新劇の先端をいく築地小劇場を立ち上げたのが青森県関係者の小山内薫だと当時の青森県の知識人たちは知っていた。そのような小山内薫に太宰が憧れた可能性は非常に高いのではないか。なお、小山内は昭和三年十二月に急逝した。『東奥日報』『弘前新聞』いずれも、小山内を青森県出身者および関係者として報道している。⁽²⁴⁾

六 ヴァリエテと『細胞文芸』創刊号

太宰は二年生へ進級すると、昭和三年（一九二八）五月に『細胞文芸』創刊号を仲間と出版する。その創刊号の辞で述べられている「ヴァリエテ」について、筆者は拙稿において、ドイツ映画「ヴァリエテ」との関連を述べた。しかし、その後の調査でドイツ映画のはじまりの一つが「ヴァリエテ」であり、ベルリンのヴァリエテ劇場「ヴァインターガル

テン」ということがわかった。映画「ヴァリエテ」では「ヴィンターガ
ルテン」を舞台にしていた。ヴァリエテとは演芸場であって、踊りや曲
芸、喜劇など多彩な演目から成っていた。『細胞文芸』の創刊号の辞に
「ヴァリエテカラ、果シテ如何ナルモノガ飛ビ出ルカ」とあるのも、ベ
ルリンのヴァリエテ劇場を示唆したと考えられる。また『細胞文芸』創
刊号の表紙にいろいろな絵柄があるのも、このヴァリエテ劇場を連想さ
せ、近代劇や歌舞伎、喜劇や心理劇など多彩な創作世界を見せようとし
たと考えられよう。「高慢な」文壇に対して、単調な「文学」ではなく、
多芸な「創作」で驚かせたかったのだろう。創刊号の辞で次のような文
章があるからである。⁽²⁵⁾

俺達ハ創作ノ学問ナル説ニ対シテ不遜ニモ懷疑ス。故ニ俺達ハ
「文学」ナル語ニ単純ナ嫌悪ヲ感ズル。俺達ハ信ズル、「創作ハ
技芸ナリ」ト。

次に『細胞文芸』創刊号の「細胞分裂」をみてみよう。文壇の代表格
『文藝春秋』に対して、その自尊心をあざ笑い批判する。そして既存の
作家と新進の作家および流行のジャンルに区別し、名指して批判を展開
する。武者小路実篤と島田清次郎を独善主義として批判する。徳田秋声
・島崎藤村・正宗白鳥に「今は死にどき」といい、久米正雄や佐藤春夫
にも容赦ない。芥川龍之介の自殺さえ「既成作家」として「当然の結
末」と言う。新進作家に横光利一・川端康成・片岡鉄兵を挙げ、「買い
かぶられて居る怪物」とし、個別に批判している。右記三人は岸田國士
や衣笠貞之助監督らと結託し新感覚派映画聯盟を立ち上げ、ドイツ表現
主義風の映画「狂った一頁」（大正十五年公開）をつくった。同映画は

前衛映画の代表作の一つという。太宰は、新しい表現を試みた彼らに嫉
妬したのではないか。⁽²⁶⁾

ここまで、批判の対象とされた人物は、実は佐藤春夫以外、名字等で
表記されている。次の村山知義と金子洋文に対しては、姓名で記してい
る。その理由は、彼らが当時の最先端を走り、創作の先駆者ゆえ大きく
嫉妬したためではないのか。村山と金子をプロレタリア作家とし、プロ
レタリア文学の主義を認めながらも、マルクス主義の広告屋かと嘲笑し、
村山知義は「自重」しなければならず、仲間うちから「天才病患者」と
言われているという。事実、村山は仲間から「日本のダ・ヴィンチ」と
称されていた。村山自身は、大正十一年（一九二二）にベルリンへ留学
し、帰国後に前衛美術団体「マヴォ」を結成し、日本初の構成主義的装
置で演劇史に衝撃的な登場をし、その多彩な才能を十分に發揮して「時
代の寵児」ともてはやされていた。金子洋文に対しては、戯曲の技巧の
老練さだけは敬服できるが「もはやプロレタリア作家ではない」と述べ
ている。金子は、フランスの新しい思想を取り入れた『種時く人』（土
崎版および東京版）創刊に関与した人物なのである。しかも同雑誌は、
プロレタリア文化運動の演劇および映画方面の起源に相当する。その彼
に「もはやプロレタリア作家ではない」と評価することは痛烈な批判で
ある。右記の村山と金子を特徴的なプロレタリア作家の見本として扱い、
プロレタリア芸術といった最先端の創作活動をする彼らを酷評している
のである。⁽²⁷⁾

その一方、俗悪化の大衆文芸を見るに忍びないしながら、そのなか
で「幾分純文芸的な臭味」があるのは「創作探偵小説」であり、観客を

驚かせる「魔術」という。少なくとも探偵小説については或る一定程度の評価をしている。そして、昭和三年の第一回普通選挙に出馬して落選した菊池寛を「のつそり」登場させて結んでいる。拙稿で太宰が探偵小説や探偵映画に興味があったらという見解は、この「細胞分裂」からもうかがえよう。⁽²⁸⁾

つまり「細胞分裂」は、既成の文壇、既存の主義への批判と新進の作家、最先端の作家に対する嫌みや批判から構成されている。その批判順序は創作と大衆への影響力に比例すると思われる。細胞が分裂するよう、新しい主義や創作が生み出されていく文壇の、その最先端に位置するであろう村山や金子への痛烈な批判は、若き太宰の創作に対する意欲と、西洋の文化を吸収した村山や金子らの活動に対する嫉妬および憧れを示すものではないだろうか。

七 もう一人の俳優名「Sojin」

拙稿では、自筆ノートに書かれた俳優名が二名だと述べた。自筆ノート「修身」六三頁の上部に、たくさんの筆記体「Shuge」「Shüge」等の中に、一つ「Sojin」という文字がある。「Sojin」とは、上山草人のハリウッド俳優名である。つまり自筆ノートには、都合三名の俳優名が記載されているのである。

上山草人については拙稿でも簡単に触れた。ここでは、もう少し深く触れてみよう。草人は、宮城県出身で、谷崎潤一郎との交流も深く、渡米前は近代劇協会を立ち上げた新劇の先駆者の一人だった。大正四年

(一九一五)七月、帝劇で上演された「桜の園」の監督を小山内薫に頼したこともある。「草人」とは俳号であり、詩や小説を執筆していた。太宰が好んだ傾向からすれば、国際的に活躍し、多彩な才能を持つ上山草人は好みであり、彼に憧れたのだといえよう。⁽²⁹⁾

だが、それだけではない。草人は、『新青年』誌上で、ハリウッドでは探偵映画によく出演していたことを披露している。歯が悪いため、歯が無く、そのため二〇個以上の入れ歯を所持し、これが扮装に役に立ったという。まさに草人は変装の名人だったのである。換言すれば、変装がうまく、色々な役柄になりすますのがうまいといえよう。拙稿で述べたように、太宰は分身や替玉を意味するドツペルゲンガーを好む傾向にあるため、上山草人の俳優としての持ち味も魅力だったにちがいない。また「性格俳優」として、ロン・チェイニーやコンラート・ファイトラと比肩した実力も見逃せない事実だろう。なお、草人出演映画の上映は、太宰の官立弘高時代と重なっている。これは、アドルフ・マンジューやコンラート・ファイトと同様である。⁽³⁰⁾

太宰執筆の短篇「彼」(『細胞文芸』昭和三年七月)には、草人の風貌が反映された箇所がある。自筆ノート「修身」二二八頁の左下には、素顔の上山草人によく似た似顔絵があり、同頁上部には「彼」の主人公とおぼしき学生が描かれている。草人は、「ソージン髭」と称された髭が特徴的である。草人曰く「真中を少し離して両方に細く、しかも長くのばした独特のもの」であるという。「修身」二二八頁の左下の似顔絵は、確かに右記特徴を持つ髭であり、その風貌は素顔の草人によく似ている。⁽³¹⁾ 実は、上山草人は弘前市と因縁がある。草人の息子竹三郎が弘前市に

住み、同地の小学校に通っていたためである。訳あって、東奥義塾塾長の笹森順造が保護者となっていた。昭和四年十二月、草人の帰国に際し、竹三郎は上京した。草人は、笹森順造を表敬訪問するために、同月三十一日、弘前を訪れた。草人の来弘は、地元新聞『弘前新聞』『東奥日報』で報道されている。国際的に活躍する俳優の来弘は、多くの人々に歓迎され、周知の事実だったろう。⁽³²⁾

八 映画「笑ふ男」

大正末から昭和初期の映画、特に洋画は芸術映画（ドイツなど）と商業映画（アメリカ）の二種類に大別できよう。しかし、世界的な経済不況となると、ドイツ映画界もその影響を受けている。そのひとつは、パウエル・レニなどの名監督や名優らが渡米し、アメリカで映画を制作し出演したことであろう。昭和二年（一九二七）、コンラート・ファイトも渡米し、映画に出演している。⁽³³⁾

映画「笑ふ男」（昭和四年一月日本公開）は、コンラート・ファイト主演、パウエル・レニ監督、ビクトル・ユゴー原作の作品である。ちなみに、原作の邦訳題名は「笑ふ人」であり、大正十一年（一九二二）に冬夏社から宮原晃一郎訳で刊行されていた。映画「笑ふ男」は青森の文芸館で昭和四年（一九二九）六月に公開された。「笑ふ男」は、コンラート・ファイトの代表作の一つといえよう。それは、ドイツの名優が異国の地で名優として活躍したことを意味する。⁽³⁴⁾

映画「笑ふ男」では、貴族である父親の謀反の疑いにより口に「永久

の笑ひ」を刻まれ、捨てられ、やがてサーカスの道化（clown）として人気者となる主人公ギンプレーンの数奇な運命を、コンラート・ファイトが卓越した演技で表現した。原作は貴族政治の批判面が濃く描かれるが、映画では、貴族政治に対する批判よりも主人公の悲哀と慟哭を深く描いているといえよう。ほかの道化役は、化粧を落とせば素顔に戻るが、主人公の笑いは、永久であり落とせない。その悲哀を、コンラート・ファイトとパウエル・レニ監督が巧みに見せている。笑うことに潜む多面的な感情や心理をうまく表現し、映像化した作品が映画「笑ふ男」と考えられないか。⁽³⁵⁾

このような主人公を、自筆ノート最大の似顔絵として描かれたコンラート・ファイトが演じたゆえに、映画「笑ふ男」は、のちの太宰文学の特徴を示唆する作品に数えられるのではないか。特に、ドイツ表現主義映画の代表作「カリガリ博士」、ドッペルゲンガーを描いた「プラーグの大学生」、右記の「笑ふ男」といったコンラート・ファイト出演しない主演作品が、太宰の官立弘高時代に弘前および青森で上映されていたことは特筆すべきことだろう。自筆ノート「修身」以外にもコンラート・ファイトの似顔絵が、太宰の自筆ノート「心理学」に描かれていたことから、太宰にとってコンラート・ファイトは、非常に印象深い俳優といえよう。⁽³⁶⁾

おわりに

自筆ノート「英語」「修身」に俳優名と、その似顔絵が描かれた三人

の俳優は、それぞれ特徴がある。アドルフ・マンジューは、彼と父源右衛門に容貌が似ており、太宰の父という彼の文学作品に影響を与えた人物を彷彿とさせている。上山草人は、探偵映画に多く出演し、「草人七変化」³⁷⁾と言われるほど変装のうまい俳優だった。様々な役柄をこなした草人は、太宰のドッペルゲンガーへの興味を引き出させる俳優だったと思う。コンラート・ファイトは、ドイツの名優であり、表現主義映画など、怪奇風で心理的なものを描く映画に出演し、ドッペルゲンガーを描く作品に主演し、「性格俳優」として地位を築いていた。彼らは、いずれも太宰の文学作品を読み解く重要な人物だと考えられよう。また、彼らの主演および出演作品が、太宰の官立弘高時代に上映されたことも、若き太宰を知る上で重要である。

太宰が自筆ノート「英語」「修身」に俳優名と似顔絵を描き、ドイツ語で「geschlossen」（閉館ないし休館の意味）を著したことは興味深い。創作家として映画や演劇を授業中に想像していたのだろう。現に太宰は、自筆ノート「修身」に、短篇「彼」の主人公に似た学生服の青年と、素顔の草人の似顔絵を描いている。そう考えると『細胞文芸』創刊号の辞の「ヴァリエテ」とは、若き太宰の創作活動において大切な鍵にあたるのではないか。彼は多芸で先駆的な表現をし、かつ国際的に通用する作家に憧れたのではないだろうか。おそらく彼は、右記三人の俳優が多彩な演目を誇るヴァリエテ劇場で活躍する姿を思い描いていたのかもしれない。今後の研究で明らかにされることを期待したい。

弘高時代に書かれた太宰の自筆ノートは、後に作家となる太宰治の作品を読み解く重要な鍵が随所に隠されている。もちろん自筆ノートだけ

で彼の書いた作品の鍵がすべてわかるわけではない。しかし、彼が残した自筆ノートや作品の背景を、歴史的に新聞・雑誌等で読み解くことで、新しい太宰治の研究視点が生まれるのではないかと確信している。さらに、太宰の自筆ノートは、彼が生きた昭和初期の世相や地方都市弘前の様子を知る上でも大切な資料である。彼の自筆ノートが文学や歴史学の研究に広く活用されることを願ってやまない。

註

(1) 官立弘高時代の太宰治研究については、相馬正一著『増補 若き日の太宰治』（津軽書房、平成三年）などがある。プロジェクトの成果については、『平成二十二年度 太宰治自筆ノート研究プロジェクト成果報告集』（太宰治自筆ノート研究プロジェクト〔編〕、平成二十三年三月）、『平成二十三年度 同』（同平成二十四年三月）を参照。

(2) アドルフ・マンジューと津島源右衛門の容貌については、前掲報告集に所収の石川義朗「太宰治自筆ノートの落書きイラストについての報告 その2」を参照。

(3) 山内祥史著『太宰治の年譜』大修館書店、平成二十四年。『東奥日報』大正十二年三月二十二日付。「三銃士」は人気のため上映期間延長となった（同大正十二年三月二十六日付）。「こんどの映画」によると「三銃士」は二十二日から上映（同大正十五年十月二十二日付二十一日夕刊）。「縫れ行く情火」（同十二月十日付九日夕刊）。

(4) 小倉浩一郎著「世界映画風俗史」（『最尖端民衆娯楽映画文献資料集 一四』ゆまに書房、平成十八年）。なお、コンラート・ファイトについては、拙稿を参照。

- (5) 「弘前地方の活動写真に就て(一)から(四) 逸名生」(『弘前新聞』大正十一年五月十三日・十五日・十六日・二十一日付)。「キネマ週報」(同大正十二年五月十六日付)。「弘高映画研究会の今後」によると、弘高映画研究会は大正十二年の冬に結成され、以来「世界的の名画を弘前に紹介すべく」活動しているという(同大正十三年十月八日付)。
- (6) 「弘高落成記念名画無料公開」(『弘前新聞』大正十三年一月十七日付)。「キネマ界」(同十八日付)。弘高落成記念の無料映画公開ではロン・チェイニー主演の「ミラクル・マン」も上映された(同十七日付)。
- なお、「狂へる悪魔」は、大正十二年九月に弘前市の慈善館で上映されていた(同大正十二年九月十九日)。弘高映画研究会は、ドイツ映画のほかに、「失ふべからず」「熱国の薔薇」「女性の敵」、ルドルフ・ヴァレンティノの「椿姫」、イタリヤ映画「シラノ」の上映に関わるなど、弘前市の映画界に貢献している。
- (7) 「キネマ界」によると、二月十二・十三日に方円館で公開(『弘前新聞』大正十三年二月三日付)。「キネマ界」(同八日付)。「キネマ界」(同十一日付)。「独逸二大名画公開」(同五月二十三日付)。
- (8) 『弘前新聞』大正十一年二月十七日付。『東奥日報』大正十三年八月十四日付。
- (9) 「キネマ欄」(『弘前新聞』昭和二年十一月二日付)。
- (10) 「我れ若し王者なりせば」は十一月二十日から三日間、慈善館で上映(『弘前新聞』昭和二年十一月二十日付)。「キネマ週報」(『東奥日報』大正十五年十月十五日付十四日夕刊)。「三人の名優に対する大それた難癖 STK」(『東奥日報』昭和二年八月十六日付十五日夕刊)。「きねま」と文壇と芥川龍之助と(『東奥日報』昭和二年八月二日付一日夕刊)。「ポー・ジェスト」は青森の遊楽座で昭和二年九月八日から上映され、連日満員で日延べとなった(同九月九日付八日夕刊・十四日付)。なお、

- 渡米したコンラート・ファイトが所属したユニバーサル社の宣伝部が「希有の性格俳優」としたという。ちなみに、三人の名優とは、コンラート・ファイトのほかジョン・バリモア(芸術的俳優)、ロン・チェイニー(世界的俳優)である(同八月十六日付十五日夕刊)。
- (11) 「文芸雑談」、三嶋讓「注解(文芸雑談)」(『芥川龍之介全集 第一四巻』岩波書店、平成八年)。安藤宏「解説 太宰治の旧制高校時代のノートについて」(『資料集 第五輯太宰治・旧制弘高時代ノート「英語」「修身」編集・発行 青森県近代文学館、平成二十年)。
- (12) 相馬正一著『増補 若き日の太宰治』津軽書房、平成三年。山内祥史前掲書。
- (13) 相馬正一著『太宰治と芥川龍之介』審美社、平成二十二年。
- (14) 「東京女義太夫 竹本組春来る」(『弘前新聞』昭和二年九月十五日付)。「演芸 お待兼ねの女義太夫 本日弘前座」(同十七日付)。「演芸 大人りの女義組春会」(同十八日付)。
- (15) 「天狗の義太夫大会」(『弘前新聞』昭和二年九月二十九日付)。「天狗の義太夫」(同三十日付)。「天狗義太夫の二日目語物」(同十月一日付)。「柳風会の義太夫会」(同十一月十一日付)。「柳風会の義太夫番組」(同十二日付)。「柳風会の義太夫大会」(同昭和三年三月九日付)。「弘前座の柳風会」(同十七日付)。
- (16) 齋藤三千政「作家の夢追いかけて―弘高時代の太宰治―」(『平成二十三年度 太宰治自筆ノート研究プロジェクト成果報告集』平成二十四年三月)。「小土佐 今晩から」(『東奥日報』昭和三年六月二十六日付)。「(広告) 本月初日になりました 竹本小土佐」(同二十七日付)。「演芸 愈々本月初日 竹本小土佐」(『弘前新聞』昭和三年六月二十九日付)。「演芸 好評の女義 小土佐」(同三十日付)。「演芸 女義名人 小土佐」(同八月十三日付)。

(17) 中村三春「太宰治と義太夫」(『国文学 解釈と鑑賞』第六四卷九号、平成十一年九月)。藤田進「太宰治と義太夫」(『郷土作家研究』第三二号、平成十九年六月)。齋藤三千政前掲論文。『義太夫全集』上巻と下巻は、『日本音曲全集』日本音曲全集刊行会、昭和二年発行の第二巻と第一〇巻に相当する。

(18) 「今昔」(葛巻義敏編『芥川龍之介未定稿集』岩波書店、昭和四十三年)。小山内富子著『小山内薫 近代演劇を拓く』慶應義塾大学出版会、平成十七年。

なお、自筆ノート「英語」一一五頁には「America」一三三頁には「Brussel」とある。

(19) 原仁司「太宰治と近代劇」(安藤宏編『日本文学研究論文集』四一 太宰治』若草書房、平成十年)。宮内淳子編集『コレクション・モダン都市文化 第三巻 築地小劇場』ゆまに書房、平成十六年。小山内富子前掲書。山内祥史前掲書。「ロシア大使劇壇の士と握手」(『東奥日報』昭和三年三月十一日付)。

(20) 註(13)参照。

(21) 小山内富子前掲書。「六花会十二月例会」(『陸奥の友』第二号、大正八年一月)。對馬恵美子「前田照雲について」(『青森県立郷土館研究紀要』第三四号、平成二十二年三月)。小山内薫「孫の巡礼(上)」(『陸奥の友』創刊号、大正七年十二月)、「同(下)」(『同』第二号、大正八年一月)。津島源右衛門「地方開発の要諦」(『同』第七号、大正八年六月)。津島文治「戯曲 奪ひ合ひ」(『同』第三卷第七号、大正十年八月)。

なお、小山内薫は『東奥日報』大正十五年十二月十三日付けの「一万二千号記念 青森県大観 五十五」で「本県出身の芸術家」として、棟方志功や今純三、太宰の三兄津島圭治らとともに紹介されていた。

(22) 「新しい芝居とはどんなものか―築地小劇場来演に際し 今純三」(『東奥日報』昭和二年八月十二日付十一日夕刊)、「同(下)」(同一日付十二日夕刊)。「築地来演脚本『熊』解説」(同十八日付)。「築地来演脚本『愛慾』梗概」(同二十日付十九日夕刊)。「『狼』と『海戦』―理性の敗北― 淡谷悠蔵」(『東奥日報』昭和二年十一月十日付九日夕刊)。「築地小劇場の『狼』と『海戦』」(同二十三日付)。「歌舞伎座で」(同二日付十一日夕刊)。「本社来訪の築地小劇場部員」(同十一月十三日付)。「『海戦』―築地小劇場の思出― 柿崎守忠」(同)。「独仏の二名曲を上演する 築地小劇場公演 十四日弘前座に於て」(『弘前新聞』昭和二年十一月十日付)。弘前では築地小劇場歓迎会を弘前劇研究会や弘高劇研究会が主催(『東奥日報』同十五日付)。

(23) 鳴海和夫「金木町にて」(『太宰治研究』筑摩書房、昭和三十一年)。原仁司前掲論文。「伯父ワーニヤ雑考 竹内俊吉」(『東奥日報』昭和三年八月十日付九日夕刊)。「東都新劇の明星 築地小劇場公演」(『弘前新聞』昭和三年八月十日付)。「築地小劇場の来青を喜ぶ 小笠原功」(『東奥日報』同十四日付十三日夕刊)。「菊谷栄氏の芝居絵展」(同十五日付十四日夕刊)。「けふ来演の築地小劇場」(同十五日付)。

(24) 「わが演劇界の恩人 小山内薫氏急死 本県人にして享年四十八才」(『東奥日報』昭和三年十二月二十七日付二十六日夕刊)。「小山内薫氏逝去 本県が生んだ劇作家」(『弘前新聞』昭和三年十二月二十七日付)。

(25) 『細胞文芸』創刊号(昭和三年五月) 日本近代文学館所蔵。平井正『ドイツ映画史 一九〇六一―一九四五』東京ドイツ文化センター、昭和六十年。奈倉洋子「黎明期のドイツ映画と日本」(『京都教育大学紀要』第一〇五号、平成十六年九月)。

(26) 前掲『細胞文芸』十重田裕一「一九二六年日本、文学と映画との遭遇」(『比較文学研究』第九二号、平成二十年十一月)。

なお、「細胞分裂」の執筆者は太宰という（相馬正一「太宰治の青春像―二律背反の〈生〉―」『資料と研究 第一〇輯』編集 山梨県立文学館、平成十七年）。

(27) 前掲『細胞文芸』、『日本戯曲全集 現代篇 第一七輯』春陽堂、昭和四年。『種時く人』『文芸戦線』を読む会編『フロンティアの文学―雑誌『種時く人』の再検討』論創社、平成十七年。正木喜勝ほか「プロレタリア文化運動の系譜（演劇・映画を中心に）」、井上理恵「村山知義の演劇的足跡」（岩本憲児編『村山知義 劇的尖端』森話社、平成二十四年）。

(28) 前掲『細胞文芸』。

(29) 「上山草人のこと」（『谷崎潤一郎全集 第一七巻』中央公論社、昭和四十三年）。細江光「上山草人年譜稿（三）―谷崎潤一郎との交友を中心に―」（『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』第三九号、平成十五年）。上山草人著「素顔のハリウッド」（『最尖端民衆娯楽映画文献資料集 一三』ゆまに書房、平成十八年）。

(30) 上山草人前掲書。「われらの三人探偵映画座談会」（『新青年』昭和五年三月）。『新青年』は本の友社出版の復刻版を利用した。なお、草人出演作品「蝙蝠（バット）」（『東奥日報』昭和二年五月六日付五日夕刊、『弘前新聞』昭和三年七月十八日付）。「支那の鸚鵡」（『東奥日報』昭和三年四月二十日付一九日夕刊）。「悪魔の踊り子」（『東奥日報』昭和三年七月二十七日付二十六日夕刊）。「キング・オブ・キングス」（『東奥日報』昭和四年六月七日付六日夕刊）。註（10）の三人の性格俳優のうち二人（ジョン・バリモア、ロン・チェイニー）と共演した経験のある上山草人には、コンラート・ファイトと「支那の鸚鵡」主役に関する逸話がある（上山草人前掲書）。

(31) 上山草人前掲書。相馬正一著『太宰治の原点』審美社、平成二十一年。

(32) 「上山草人が二十日横浜入港」（『弘前新聞』昭和四年十二月七日付）。「上山草人君昨日弘前着」（同昭和五年一月一日付）。「上山草人氏 弘前へ来る」（『東奥日報』同二日付）。

上山草人の息子竹三郎が笹森順造を保護者とした理由は、「時敏小学に通ふ竹三郎君の運命（上）」「同（下）」（『弘前新聞』昭和三年六月二十五・二十六日付）を参照。

(33) 田中純一郎著『日本映画発達史 I』中央公論社、昭和三十二年。G・A・ヒュアコ著／横川真顕訳『映画芸術の社会学』有斐閣、昭和六十年。

(34) 「こんどの映画」によると、六月十五日から文芸館で「笑ふ男」が公開（『東奥日報』昭和四年六月十四日付十三日夕刊）。宮原晃一郎訳「笑ふ人」（『ユーゴー全集復刻版 第三巻 小説（三）』本の友社、平成四年）。ユーゴー自身は「此書の真の名は「貴族政治」と記している。

(35) 『キネマ旬報』（文生書院復刻版）No. 三二八（昭和四年一月十一日）。前掲「笑ふ人」。

(36) 相馬正一「太宰治とその時代 二三」（『陸奥新報』昭和四十五年九月二十日付）。

(37) 上山草人前掲書。

（なかぞの・みほ 青森県史編さん近現代部会調査研究員）